

室町時代および朝鮮時代における詩画軸に関する研究

著者	李 元惠
号	3
学位授与番号	34
URL	http://hdl.handle.net/10097/36878

LEE
李

WON
元

HYE
惠

学位の種類 博士(国際文化)

学位記番号 国博 第 34 号

学位授与年月日 平成16年 3月25日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科(博士課程後期 3 年の課程)
国際文化交流論専攻

学位論文題目 室町時代および朝鮮時代における詩画軸に関する研究

論文審査委員 (主査)

教授 佐藤 勢紀子

教授 田中 継根

教授 栗林 均

助教授 鈴木 道男

助教授 加藤 弘

教授 河合 正朝(慶応義塾大学)

論文内容の要旨

第 1 章 序 論

本研究は、室町時代の詩画軸について従来からの見方をふまえつつ、その展開の様相をより多角的な視野の中で追究していくことを目的とする。室町詩画軸とは、五山禅林における詩文の盛行の状況下で、とりわけ応永(1394-1428)・永享(1429-1440)年間に著しく現われた、多くの場合詩と密接に関わる絵画を伴う一群の芸術形式である。

これらの詩画軸は室町禅僧たちの私的な交友圏のなかで行われた詩画生活の証となって現れている。詩画軸制作を促した背景には当時の禅における隠遁思想や現実世界との関わり、禅僧たちの儒学観などがある。しかしながら従来からの研究においては詩画軸における儒学の関わり、意味、機能などがあまり重視されておらず、断片的にしか扱われていないのが現状である。したがって筆者は詩画軸における儒学観との関わりについてさらなる考察、検証を行う必要があると考える。

さて、詩と画が一つの画幅に現われるのは、決して室町時代に限られたことではない。何首の題

詩のあるものをもって詩画軸と認めるかは主観的な判断によって定められることになり、このような詩画軸概念の曖昧さを避けるには、題詩が単に画図をみた印象、感想を述べるだけではなく、画図の主題と密接な関連があって画図の十分な理解のためにはその詩文の解釈が欠かせないなどという条件をおくことが必要になる。このような諸条件に基づいての詩画軸論を試みようとするとき、どうしても中国や朝鮮との関わりを考慮せずに論考を進めていくわけにはいかないであろう。とりわけ筆者は、朝・日間の文化の交流や接点に焦点を当て、その具体相を明らかにしていきたい。

室町詩画軸と朝鮮画壇との関連性については熊谷宣夫氏によっていち早く指摘されている。しかし、氏の論考では論点の提起にとどまり、具体的な解明までには至っていない。そこで筆者は本研究を通じて熊谷氏が漠然と提示するにとどまった、朝・日間における共通の詩画形態についての検証を行いたい。韓国および日本における研究史間の断絶のために朝・日間の比較されるべき絵画形式の一面が認識されていないのである。熊谷氏以降の関連研究は、日本の研究者の場合、この時代の様式上の類似や画人たちの影響関係、また使節団の行動の中で行われた文人たちの交流相の追究が主であって、朝・日共通の詩画形式についての論考は皆無に等しい。一方、韓国における朝・日間関係に関する研究状況をみても事情は同様である。

そのような空白が残っている原因は何であろうか。漢文だけでは解決できない言語による問題もあろうが、それとともに室町時代の作品が何点か遺存しているのに対し検討されるべき同時代の朝鮮の作品がほとんど伝わっておらず、作品史料を通じての検証が極めて難しいということもある。したがって僅かに残った作品史料を手がかりとして文献資料を通して朝鮮側の詩画軸の世界を復元しなければならない。その際、室町詩画軸の全貌をより多角的に検討することが不可欠なこととなってくるのである。

第2章 室町の詩画

1 詩画軸の成立

室町時代の前期に、五山文学界を中心に詩僧たちの営む書齋生活や文友の送別あるいは懐友の思いを詠んだ複数の詩が一幅に書きつづられ、多くの場合画図が伴い、さらにその軸の主題、制作の動機などを説明する序、あるいは跋が加えられた「詩軸」もしくは「詩画軸」と呼ばれるものが流行し、熱狂的に制作された。

詩画軸という呼称は、「……詩巻」、「……詩軸」、「……画軸詩」およびその他から、現代において便宜上選ばれたのであって、制作当時における題目付けは一定しない。制作当時において詩軸あるいは詩画軸という言葉の扱いはそれほど重要な問題ではなかった。すくなくとも詩画軸発生の前期の段階においては、主導する五山詩僧たちの関心が「軸」を成り立たせる贅へ傾倒していた。つまり圧倒的な勢いの文学的興味で創作活動を主導していったのである。文献を含め、現存する詩画

軸の題目を見てみると、詩僧たちの意識の中では詩軸と詩画軸とを区別なく、使っていることがわかる。

本論考を行うに当たって筆者は詩軸および詩画軸という言葉は別々のものではなく同様のものとして規定する。さらに「軸」と「巻」に対しても同様に扱うことにする。そもそも詩画軸の当時の制作者たちは、厳密に詩軸と、詩巻、詩画軸を区別しておらず、画図の有無や軸・巻といった今日の範疇に収まらないような形式体系を認識している。このような区別は後の時代においてのことであり、朝鮮・室町における当時の詩画形式をめぐる状況を再検討するためには本来の意味に立ち戻っての考察が必要であると考えられる。

時期的には南北朝末（1370－80年頃）にその流行がはじまり、応永年間（1394－1428）を頂点として、以後、応仁の乱（1467）直前あたりまでが室町の詩画軸の時代である。この室町詩画軸と比較検討されるべき朝鮮時代においては、室町時代のように集中的な流行の様相を示していないので、高麗末より朝鮮前期を中心にしながら必要に応じて年代の下がるものまでを研究対象とする。

15世紀前半期において花開いた詩画軸の成立背景の一つに、隠逸志向があった。とは言っても、詩画軸の世界でいう隠逸とは、描かれるテーマより、書齋とそれを囲む清雅な情景を描いた絵の中に、自らの俗な存在を逃れ、俗なる塵の刷新を期するかのような、幽隱の理想郷を感じ、それを詩にする行為の中にあつた。その描写が、現実離れするものであればあるほど、彼らの意志は強くそこに働くのである。また三教一致観（儒仏一致観）、能楽、連歌、茶道など様々な要因があり、その根底においては共通の美意識が流れていることを指摘しなければならない。これらの要因は、相互に関連して室町文化の総合体をなすものであるといえよう。その中には擬古・憧憬などを通じての遊戯の精神もあつた。いつ果てるとも知れない乱世の文雅であつたからこそその峻烈さや真剣さを伴つた世界である。

2 詩画軸における「隠」と「仕」

詩画軸の変遷について考察を進めていくに当たっては、隠逸の「隠」と仕官の「仕」というキーワードを取り上げなければならない。つまり詩文家たちの意識の中で行われた価値判断がそのまま芸術作品の中にも流れ込み、形象、形あるものとして表されたからである。

室町時代の特に応永年間（1394－1427）の詩画軸において、図上の賛文は主に五山僧たちの隠逸の志を貫くもの、あるいは「隠」と「仕」との間におかれている現実の状況を書き記すものであつた。その一例として応永20年（1413）作の「溪陰小築図」（図1）があげられる。太白真玄の序文および大丘周崇他5僧の賛文がそのような傾向を示している。この作品より5年後の応永25年（1418）の「三益齋図」には、そういった傾向に加えて鑑戒的な要素が盛り込まれている。

ここで一つの疑問が生じる。すなわち見立てなどを通しての詩画会を楽しむ以上に、詩画軸の性格として一つの教訓性を表すことを意図したのではないかということである。この「三益齋図」以

外にも例えば明応2年(1493)の両足院本「三教図」に書かれている罕牘の賛に「……繪三教於同幀、以明一致之旨、雖云墨戲、不為無補於世……」というくだりがある。また当時の禅林の好ましくない情勢を鋭く批判し、三教一致の趣旨を明らかにしようとするこの図を描かせたと指摘している。ただ鑑賞に供するのみではなく、教訓性を示すなどある種の意図的な試みを詩画軸の性格として読み取ることが可能となってくる。また文安3年(1447)作の「竹斎読書図」(図2)に書かれている竺雲等連の序文についてこれらの事情を考察してみると以下のようなになる。すなわち竺雲等連の序文は、当時の五山禅僧らの、隠逸を願う心と裏腹に、幕府や有力守護大名らとの関わりにおいては、文人官僚としての活躍を期待されることの方が多くなっていくという、矛盾した状況を端的に反映している。竺雲の序文の特徴は明確な儒教的立場に立って、隠逸というものを、俗世から逃れることを志すというよりは出処進退の術として位置づけているところにある。「仕」の否定ではなく、逆に積極的に「仕」を肯定して、「仕」の道をさまたげぬものとしてのみ、「隠」もまたよしとする考えを竺雲等連は披露している。

「竹斎読書図」の序文より後の長禄2年(1458)の年紀を持つ「聴松軒図」における、竺雲等連の賛文では、その後半の二句は明らかに隠逸というものを儒教的な立場から批判したものになっている。この図は永享5年(1433)の制作で、竺雲以外の賛者すなわち惟省徳巖、勝剛長柔、龍崗真圭、九淵龍蹊の賛文がこの年あたりに、あるいは長禄2年(1458)以前に書かれていること、また押しなべて隠逸的な傾向を表していることなどから、最後の詩文が書かれるまでの間における禅僧のあり方への認識の推移が窺えるのではないかと考えられる。この図における賛文成立の時期のひらきとともに、傾向の異なる内容の賛文が同じ図中に賦されていることは、時期を隔てながらも賛者たちが続けた議論の場を記録したものであったということを示している。

3 周文様の意義

室町水墨画、とりわけ詩画軸がいくつかに区分された各段階において、周文のなしたとされる、すなわち周文作として伝わる一群の作品を通じて彼の画業を明らかにするとともに、その周文ないし周文様の存在意義をここで考えてみる必要がある。なぜならば詩画軸成立を語る際に、いわゆる周文様というものが、そのめざすところを示し、それ以後影響を与えた画壇の様相までも提示しているからである。

周文様とは、様式的に極めて完成度の高い典型を作り上げたことの成果であった。後の画人はそれにしたいが、随時効果的な手段を用いて自らの画風を完成している。その際、様式を発展させるのに役立つ明快性が、つまり画面を作る上での鍵が確立されていたということである。諸画人が基本的な骨格を変えなくても制作できたのは、周文様に享受者あるいは需要者層に受け入れられるだけの、持続的な斬新さが備わっていたためである。

4 伝周文筆「竹斎読書図」について

「竹斎読書図」は詩画軸における典型的な作例として位置づけられている。この図にみえる儒学的立場の意を表す賛文の成立については五山詩僧の社会的活躍や当時の社会情勢と関連させて理解すべきである。

5 いくつかの画題について

室町の詩画軸時代に関連する題材に、三友図類、渡唐天神像、十牛図などがある。三友図類における清なるもの、三益の象徴は禅僧たちの憧憬・理想郷の表象であり、詩画軸の世界と直結する画題であった。渡唐天神像においては一定の定まった形式の典型的な画像の提示を通じて布教・礼拝の方便とする試みを見いだすことができる。禅宗において範となる中国とのつながり、権威付けの意図のもとに、外典の守り神となった天神を渡唐させた、意識の産物である。また極めて濃厚な禅の教材的性格を持つ十牛図においては教義の提示だけにとどまらず、自然の中の場面として設定しようとする試みがあった。禅の教義を超えてさらなる付加価値を求めようとした結果である。三友図類、渡唐天神像、十牛図に共通することは、それらの表象するものを補強するためには探し求められるだけの意味を集合し、画題の中に盛り込む必然性があったということである。そして詩画軸の、儒学の功利性の表象、教育、社交、議論の場の提示という側面と同次元の特質といえるのである。

第3章 朝鮮時代の詩画

1 朝鮮における詩と絵画

詩と画とが結合したものとしての作品は、たんに室町時代に限るものではなく古い時代までにさかのぼることができよう。島田修二郎氏は、詩画軸形式の成立を、まったく日本での自立的な発展と説明することは妥当でなく、またその用語の曖昧さについて、「題辞、題詩が単に画図を見た印象、感想を述べるだけでなく、画図の主題と密接な関連があって画図の十分な理解のためにはその詩文の解釈が欠かせない」などの条件をおくことが必要であろうと指摘している。

このような条件をもつものを詩画軸とみなすとすれば、その存在は拡大されて中国にまでおよぶばかりでなく、朝鮮画（高麗および朝鮮時代の絵画）にも当てはめられるであろう。現にそういった朝鮮画の遺作があまり伝わらないのは残念であるが、しかし文献の上での記述を見渡す限り、たしかに詩画軸の存在、あるいはその制作状況を確認することができる。たとえば、1403（太宗4）年、明の使臣馬麟は故国に残してきた「思親堂図」への思念もだし難く、詩を寄せしめることを太宗王に乞い、太宗は数人の文臣をして詩を作らせ、「思親堂詩軸」を馬麟に贈らせている。そしてこの詩軸には序文も加えられていた。室町詩画軸中の「芭蕉夜雨図」（1410年以前）（図3）も題詩は画図の上方に四段に紙を継いでしたためられており、本来においては詩と画が別幅で、画は掛幅、詩は横巻であった可能性が強いとされている。さらにこの図は、1410（応永17）年を制作の下限とし、朝・日両国間の詩画軸の共同制作を示すものとして注目されている。特筆すべきは画図上、賛

者中の一人梁需の存在であろう。つまりその名に冠した官職は「朝鮮国奉礼使通政大夫礼曹左参議集賢殿学士」とあり、そして彼の書き記した年紀により、当時足利義持の將軍就任を祝うため訪日した際の題賛であると推定され、賛者中の北海彦軾と韻を分かちあい、情感のこもった詩文を交わしていたことがわかる。

一方、1424年（応永31）には日本国王使臣として朝鮮に赴いた圭籌、梵齡所持の山水画をめぐり、朝鮮の集賢殿の文臣六人による詩文制作が行われている。おそらくこれは横巻となって日本に持ち帰られたものであろう。現にこれらの詩に酷似した画面構成の、伝周文筆「蜀山図」（1435年以前）が伝わっている。この年はちょうど詩画軸の全盛期にあたり、詩画軸の大成者とされる画僧の周文も同行していた。

これらの朝・日における二つの共同制作、つまり1410年および1424年の出来事に関しては熊谷宣夫氏が「芭蕉夜雨図」の中で触れ、当時、両国の詩軸の形勢が共通であったろうこと、したがって絵画史的に頻繁な交渉があったろうことを指摘しながらも的確な根拠を提示できず、漠然たる相互関係を推定するに止まると述べている。

そのほか、15世紀の朝・日間においては詩画に関連し、はなはだ頻繁な往来が繰り広げられており、詩画軸に対して両国の制作者たちの間には共通の認識が成立していたと見るべきであると考えられる。

日本における「題贈玉桂上人詩巻」、「白雲丹壑詩画叙」、「招越上慈溪侍者詩軸跋」、「詩画軸序」、「竹斎読書図詩画序」、「題湛碧斎画軸」などといった文献使用例に対し、朝鮮側文献における使用例も「馬氏思親堂図詩序」、「成修撰三問臨江甌月図詩序」、「題淮月軒詩軸」、「題鳳林寺僧詩軸画本」、「枕流台賦詩図序」などとなっている。そして室町詩画軸の場合、山水画がその主題して限られるのに対し、朝鮮側においてはそのような限定や暗黙の決まり、言いかえればある意味での土俵は認められない。さらに室町詩画軸のような複数人による詩文制作例も僅かながら散見する。詩画軸の軸という語は本来、掛軸だけを指すものではなく、横巻をも含むものであるが、日本の場合、掛軸を指すことの方が多く、かつ時代の下るにしたがってその方がより多くなる。おそらくそれは室町詩画軸が定型化した様式として流行し、さらに当時大陸から多く伝来した軸装の絵画や道具類を床の間などに並べて鑑賞するということとも関連がある。朝鮮の場合は、軸と巻とを別のものとして分けてとらえていない。それは朝鮮側において好まれている鑑賞方式、すなわち横巻もしくは画帖などに仕立てられたものを机上（あるいは床上）に置いて鑑賞する方式がより好まれていたこととの関連性が考えられる。

文献に現れている詩画軸関連の制作例をみると、まったく共通の制作形式であったことが確認できる。つまり序文あるいは跋文があってさらにおおかた複数人の賛文が続き、そして画（必ずではないが）が備わるといった形式である。たとえば、「思親堂詩軸」、「成修撰三問臨江甌月図詩序」、

「瀟湘八景詩帖」、「夢遊桃源図」などがある。

「夢遊桃源図」(1447年)(図4)は、朝鮮・室町にきわめて近接した芸術的形式があったことを窺わせる、朝鮮の現存する最大の作例である。この朝鮮最大の詩画軸の中にも、室町詩画軸の特質の一面とされる、絵画と政治理念との結びつき、儒学の実践における議論・コミュニケーションの場的側面が潜んでいる。儒学と関わる詩画軸をめぐる二重の意味体系を読み解かなければならないのである。「夢遊桃源図」に携わった21人の文臣たちは後に各々の運命が進と退、生と死へと真二つに分かれている。この図は、安平大君のみた夢の世界であり、遠からぬ将来に避けて通れない政変の反転の世界である。この図に詩文を書いた李塏、朴彭年、成三問などが安平大君と同様に政変(癸酉靖難)によって命を落としているのに対し、融通性のある生き方をするように勧めた漁父のことは、「漁父辞」を詩文に援用している申叔舟をはじめ、鄭麟跡、崔恒などは靖難功臣となって官職を上りつめ全うしている。

2 朝鮮の画壇

朝鮮時代の一傾向として、絵画に対する国家政策は、当時の主導者層、すなわち王および文臣たちによって急激に愛好されたり、あるいは軽視されたりするような緊張状態にあった。

朝鮮が国家経営の最高理念として儒学を迎え入れたことは朝鮮前期における芸術意識の方向付けのための決定的な要因になったと言える。その国家政策によって、朝鮮では絵画を審美的鑑賞物としてとらえることのほかに、為政から民衆の実生活に至るまでの教化的性格を持つものとしての絵画を要求したのである。

朝鮮においては士大夫等による余技画壇の活躍も絵画観形成の一要因となるわけであるが、それを別として、儒学の実践の際、芸術特に絵画はその視覚的伝達性において有効に使われる必然性があったのである。

3 梁彭孫筆「山水図」について

この図は高麗山水画の流れに属し、畏敬的な表現とともに記念碑的效果を意図する北宋代の画風とは異なって、朝鮮初期の様式を代表する安堅派様式、つまりいくつかの塊として散らばっている題材の群れが集合し、一つの調和された総体を成すといった様式を継承している。この図は賛文の隠逸性や様式の面において伝周文筆の「竹斎讀書図」との類似性も認められ、周文様式と朝鮮絵画の関連性を抽出するうえで多くの示唆を与える作品である。

4 契会図

梁彭孫筆「山水図」の中の題材にもその片鱗が認められ、室町詩画軸と相通ずる一面があるものとして契会図があげられる。文人による契会は高麗時代に始まり朝鮮時代において大流行した、風流な集まりである。契会に際しその集まりの場面を図示し、参席者の姓名、生年、科挙及第の年度、官職などを記し、時には詩文なども備わる形式の「契会図」もいくつか伝存している。

第4章 結 論

詩画軸の成立を考察する際、単に宋元の影響のもとでの禅宗と結び付けるだけでは不十分で、儒学の影響が一つの大きな要因として作用していたことに注目すべきである。そして中国と日本との間に朝鮮および朝鮮詩画軸の存在があったことを踏まえる必要がある。朝鮮・室町の間には絵画観、世界観においては自ずと異なる部分もあるものの詩画軸という共通の土台があったのである。

室町時代、特に前期といえば水墨画とりわけ詩画軸に代表される時期であるが、筆者がこの論文を通じて提示できる新たな視点は、室町詩画軸の特に早い段階の顕著な特質あるいは制作者たる禅僧たちの目標としたものは、ほかでもなく師弟間の教育の場の提供、儒学的な理念の実践にあったということである。これについては第2章で、詩画軸の成立および展開過程についてその制作者たちの精神世界を導いた儒学の影響を考察することにより明らかにできたと考えられる。室町禅林の儒学に対する態度は、仏教弘布の方便手段としてこれを唱導し教化に従事するというものであったのだが、その過程における教育の場、議論・コミュニケーションの場を詩画軸の画面を借りて設定していたのである。

室町詩画軸についての本研究は、その背景における、主に儒学的な側面および朝鮮画との関連性を中心に行ったのであるが、前者については詩画軸の意味が従来考えられていた以上に禅林において必要とされた儒学の功利性を表象し、教育、社交、議論の場を設ける役割をしていたことが明らかになったのではないかと考える。後者については、第3章で朝鮮における詩画の形式および制作過程について考察したことによって、朝鮮側の詩画軸の世界を、ある程度文献に頼りながらも復元できたと言える。

朝鮮・室町における詩画軸の発展、展開については、室町前期の熱狂的な流行が去り、日本において題詩軸、題画軸、図詩序などという言葉が顧みられなくなった後においても朝鮮ではこれらの言葉が淡々と使われて17世紀に至るまで文献上に現れ、19世紀にも制作を見ることができる。また朝鮮における詩画軸と契会図の関連性を示唆する作品として、画面の上段部に「易安窩壽席詩軸」と記し、下段部には契会図的な場面描写をした鄭槻（1737-?）の「易安窩壽席詩會圖」があることも特記すべきである。

参考図

	作品名	制作年	形 質	(cm)	所蔵者
1	溪陰小築図	応永20年(1413)	紙本墨画	101.5×34.5	金地院
2	竹斎読書図	文安4年(1447)	紙本墨画淡彩	136.5×33.7	東京国立博物館
3	芭蕉夜雨図	応永17年(1410)頃	紙本墨画	96.0×31.4	個人
4	安堅筆夢遊桃源図	世宗29年(1447)	絹本墨画淡彩	38.6×106.2	天理大学

小築溪陰地，人言其幽。
 柳暗花明，草長苔生。
 萬物皆有情，各隨其性。
 金龜道人，其志可嘉。
 水石相映，雲霞共舞。
 別具一番風味，不與世同。
 惟願世人，共賞此景。



图1 溪陰小築圖

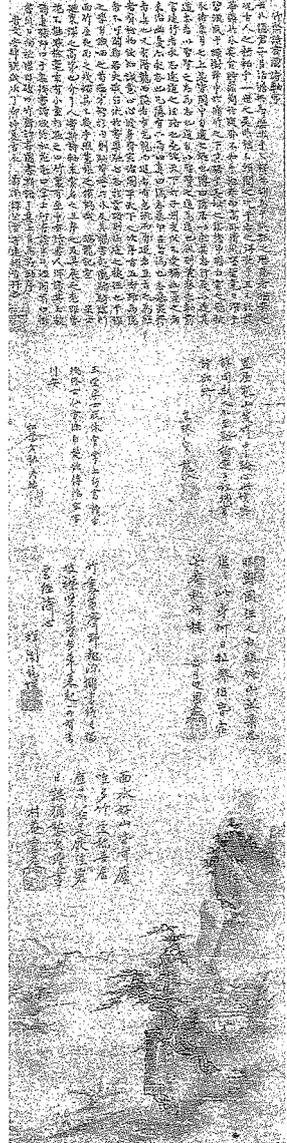


图2 竹齋讀書圖

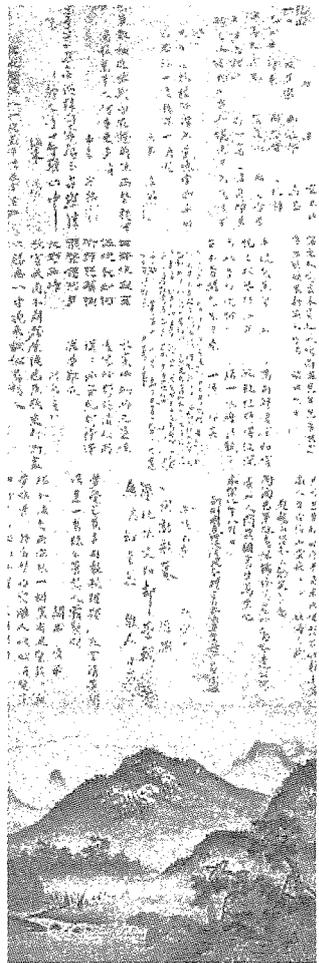


图3 芭蕉夜雨圖

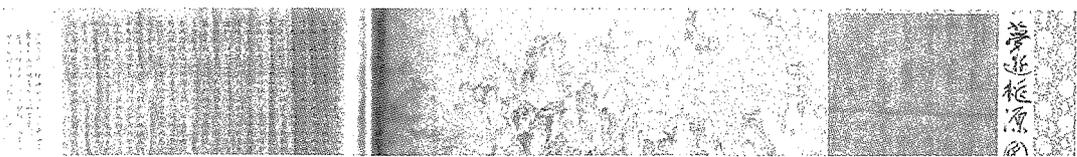


图4 夢遊桃源圖

論文審査結果の要旨

本研究は、室町時代の詩画軸の展開の様相を、朝鮮時代の詩画軸との比較を通じて解明しようとするものである。まず、室町詩画軸について、その成立の背景を概観した上で、当代の代表的画人の一人である周文とその制作様式（周文様）を受け継ぐ周辺画人の諸作品を主対象として、詩文家の意識、画家の画面構成、作品享受のあり方という三つの観点から考察を進めた。次に、朝鮮詩画軸に視点を移し、朝鮮画壇の特質を論じた上で、現存する数少ない作品の一つである梁彭孫筆「山水図」を中心に同様の観点から検討するとともに、文献資料を用いて朝鮮詩画軸の様相の復元を試み、最後に、室町詩画軸と朝鮮詩画軸の比較考察を行っている。

室町詩画軸については、その制作者・享受者の主体が禅僧であったことから、従来、その禅仏教的な側面が強調されてきた。これに対し、本研究は、これまでごく断片的にしか扱われてこなかった儒学との関連に着目し、当時の禅僧の間に儒仏不二の思想や三教一致の思想が浸透していたことをふまえて「隠」と「仕」というキーワードをめぐる考察を試み、室町詩画軸の主要な制作目的の一つとして儒学的な理念の実践があったことを指摘している。また、現在僅かな作品が残存しているにすぎない朝鮮詩画軸の様相について、文献資料を用いて検討することにより、室町詩画軸と朝鮮詩画軸が、共通の制作形式、すなわち、序文あるいは跋文があって複数人の賛文が続き、多くの場合画が備わるという制作形式を有しており、両者の間にこれまで考えられていた以上に強い関連性があることを検証した。これは、ほとんど宋・元との関係からのみ論じられてきた、室町詩画軸の背景をめぐる先行研究に対し、新たな研究上の視角を切り開くものである。朝鮮詩画軸における資料的制約もあって、一部に論証が必ずしも十分とはいえない点も見られたが、これまで正面から論じられたことのない室町詩画軸の儒学との関連、朝鮮詩画軸との共通性を指摘したことが、本研究の新知見として高く評価される。

以上のことは、本論文の著者が当該研究分野において自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。